

## 「クリッカー」

クリッカーは手のひらに乗るリモコン型のレスポンスシステムのことです。学生は質問に対して、そのリモコンの数字を押します。すると教室内の学生からの回答が教員のパソコンに挿入されたUSB端末に送信され、教員側はパワーポイントにアドインされた機能を用いて即座に集計、表示できます。合衆国で開発されたシステムで、大人数教室における学生の理解力の把握が出来、学生には知識の短期記憶への移行、集中力の維持が期待できます。<http://www.turningtechnologies.com/>

学生カードは64枚あります（教務グループにお問い合わせください）。また教育方法等改善経費でさらに170枚のカードが追加され、試験運用されています（くらし環境系・澤口、安居）。

## お知らせ

### 「室蘭工業大学 FD 講演会」

演 題

「グローバル時代をリードする人材像と大学の役割」

講 師

井上 いかうえ 洋氏 ひろし (日本経済団体連合会 社会広報本部長)

日 時

平成23年3月9日(水) 14時00分～15時30分

会 場

教育・研究1号館 C棟103



## 第7回 室蘭工業大学教育ワークショップ

### テーマ「多様化している学生にどう向き合うか」

恒例のFDWSは平成22年8月23、24日に洞爺パークホテル天翔で、新任教員6名、各コースから13名、東京都市大学から4名の23名の受講生とスタッフ（学長、理事（受講生）、WG6名、教務G3名）によって実施されました。少し詳しく内容を報告させていただきます。

#### アイスブレイキング

1. 面識のあるなしに関わらずお互いよく知らない者同士の緊張感を解きほぐし、その距離感を縮め、2. 豊かな発想につながるポジティブ感・ワクワク感を引き出し、3. グループワークの基盤となる連帯感を醸成するという点に主眼を置き、椅子取りゲームとヤンコロバ\*を実施しました。

楽しさ・面白さも感じながらリズムに乗って体を動かし続けることによって、参加者間に一体感と団結心が芽生えたところに班に分かれて、グループ名作りに取り組みました。

「G1」「はやぶさ」「Nature」「Ask Mot」

椅子取りゲームに関しては年齢・体力面への配慮が必要だったかと思われませんが、ヤンコロバに関しては一体感や高揚感の醸成という点でその果たした役割は小さくはなかったと考えています。

\*「ヤンコロバ」と皆で歌いながら、ブロックを隣に渡していく簡単なゲーム

#### WS1「クロスロードゲーム(分かれ道)」

初めてゲーム的な要素を導入しました。このゲームは、災害被災地で発生する様々な問題や、判断の難しい社会問題、道徳的な問題について議論するために開発されたものです。

参加者は名刺大の「Yes」「No」と書かれたカードを1枚ずつ持ちます。一人一問ずつ、教育活動を行う上で判断が難しいと思われる問題を作成します。例えば「講義中、机にうつぶせて寝ている学生を見つけました。他の学生はまじめに講義を聴いているようです。あなたは寝ている学生を起こしますか?」のように、イエスもしくはノーで答えられる設問です。参加者はイエスかノーかを決めて、カードをテーブルに裏向けに出します。全員がカードを出し終えたら、カードを表に向け、自分が出した答えが多数ならポイントが得られます。全員でその問題について簡単にディスカッションした後、次の問題に移ります。このゲームの目的は、学生の多様化によ

って表面化している問題を教員間で共有し、それらの問題に対する考え方、つまり教員側の多様性についても再確認することです。

「選択科目の試験で59点の学生が相談に来ました。『この単位がないと進級できない』と言っています。再試験は予定していませんでした。59点以下の学生全員に再試験を予定しますか? (yes 3/no 3)」、「講義で出席を確認する際に、明らかに女学生が1名しか居ないのに全員分(複数女学生分)の返事がありました。あなたはその学生を確認し注意しますか? (yes 5/no 1)」

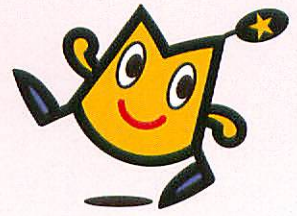
#### WS2「多様化している学生への対応」

WS1において各グループから提起された問題の中から、さらに検討すべき課題をグループごとについて抽出し、背景にあるものは何か、どう対応すればよいかについて議論を深めました。

4グループが検討した課題を分類すると、学生の「学習意欲」、「モラル」、「学力レベル」、「孤立」の4つに分けられました。学生が多様化し、これら4つの座標軸において、学生間の差が大きくなっていると、教員が感じていることの現れであると捉えられます。

「学習意欲」を扱ったグループ「G1」は、学習意欲が低いと標準年限での卒業が難しくなることに加え、引きこもりなどの事象も学習意欲の減退が引き起こす傾向があることを、この問題の重要性にあげました。学習意欲低下の背景は、他動的な学習、目的意識の低さ、アルバイトなどによる学習時間不足、先輩からの情報不足などであると分析しました。対策として、フレッシュマンセミナーで卒業までの履修計画を立てさせ目標を持たせる、落ち込んだ時の対応などについてメンタルヘルスの講義をする、学生が自身の興味で調査・発表するような少人数の科目を設ける、講義科目でも授業時間中に学生が参加できる活動を含める、授業時間内で工夫してしっかり学習させる、サークル・部活への参加を推奨し先輩から情報を入手できるようにする、などが提案されました。

4つのグループはとくに「モラル」「私語」「写しレポートの提出」「レポート未提出」などについて扱いました。例えば、「私語」については、他の学生の迷惑、教員の疲労、授業の雰囲気悪化があり、重要な課題としました。私語の背景について、学生がテレビを見ているような気持ちで授業を聞いていること、授業に対する



興味が薄いことなどにあり、授業の人数や学年で私語の多さが違うという指摘もありました。対策としては、私語が迷惑であることを説明すること、教員が学生に感心を持って私語をする理由を聞く、前方に座らせて参加の意識を高める、1つおきに座らせて話さないようにする、などが提案されました。

とてもよくできた「写しレポートの提出」「レポート未提出」にもモラルが関係しているようですが、対応策としては短期的には個別指導の強化や教員間の連携を深めること、長期的にはカリキュラムを検討し、科目間の連携やリメディアル科目の検討を行うことが提案されました。

「学力レベル」について「試験問題の難易度と再試験実施の可否」「学力不足学生の大学院進学希望」が、「孤立」については、まわりに支援者がいないことで学習が思うように進まないことが重要性として指摘されました。

余談ですが、グループ討論において、3グループが机上で各自メモをとる方法、1グループがホワイトボードを活用しており、グループ間でツールの使いかたに違いがありました。

### WS 3 「多様な学生諸君に講義する」――

班毎に多様な学生が履修する授業を構想し、その授業のガイダンスをロールプレイで披露しました。履修学生の多数へ向けたものに加え、様々な“少数派”へ向けたメッセージや指導をガイダンスに入れることが課せられました。これに対し、初回にプリントによる数学の基礎の自習を求め、これが解けない少数派の学生だけ質問に来させるようにして数学が得意な多数派を煩わせない案や、少数派である留学生へは彼らだけを対象としたメッセージを明示的に盛り込む提案が披露されました。この他、小テストは評価方法を変えると学力不足の学生への対策から優秀な学生の学習意欲向上の対策まで意味が変わるという興味深い提示もありました。ロールプレイ中は学生役からウィットに富む質問が続出し、先生役が本気で回答に苦慮される場面もありました。全般に討論も活発で、全員が楽しみながら学生の多様性への対策を再考できたことと思います。



# 北大ワークショップ 'Preparing Future Faculty' 報告

北大で大学院後期課程の学生を対象としたPFF：Preparing Future Facultyがカリフォルニア大学（パークレー）から来日したDr.Linda von HoeneとDir. Sabrina Soraccoの2名の教員の指導で、5つのセッション、7月21日から27日までの5日間で実施されました。

1. Teaching部：教育者として、どうあるべきか、講義に必要な技術。
2. Writing部：研究者として、研究のアイデアを書くこと（要約、論文等）に必要な技術

PFFワークショップの参加者は、受講生30名（うち日本人9名）、オブザーバー17名で、安居はオブザーバーとして参加しましたが事前に参加理由を書き、出欠を取られ、コメントを求められるなど楽なものではありませんでしたが、受講生のレベルの高さに驚かされました。

形式は、講義、グループ討論（4グループ）、講演、課題、宿題、プレゼンテーションをインターネット（moodle）で順次、課題提示、提出し、評価等が行われ、膨大な約300ページのテキスト、配布資料が用意されていました。

課題：Teaching部ではシラバスをつくるという課題が与えられ、講義とは何かを考えさせるものでした。Writing部は自分の研究を文章にし、プレゼンする。これに対してグループメンバーが添削をし、内容を討論しました。

全体をとおして：大学教員を目指すために、必要な技術を先に身につけておこうという企画に非常に魅力を感じました。とくにTeaching部は教員になったらすぐに必要な技術と言え、一方Writing部の論文を書くことは大学院生中に行なわれていることだが、自分の研究を人にわかりやすくまとめる技術、論文の添削方法などという、単に論文の書き方ではなく、申請書作成や、論文指導をする立場になったテクニックでした。

## 平成22年度 IDE セミナー報告（札幌）

平成22年8月19-20日、テーマ「新時代の学習サポートを探る」のもとに、いかに学生に自主的に学習させるかについて、先進例の紹介があった。

「金沢工業大学の学習支援システム」	金沢工業大学	教授	藤本元啓
「正課に連動した組織的数学学習サポート」	大阪府立大学	教授	高橋哲也
「学習支援室の活動」	札幌学院大学	副学長	石川千温
「学習障がい知見から」	釧路工業高等専門学校	准教授	松崎俊明
「千歳科学技術大学の初年次教育」	千歳科学技術大学	教授	山中明生
「アカデミック・サポートとピア・サポートによる学習支援」			

北海道大学高等教育機能開発総合センター 日吉大輔  
北海道大学大学院国際広報メディア観光学院 岡本健

## 編集後記

「FD研究会」が教育システム委員会の下に作られ、就業力育成GPでは「キャリアFD」がプログラムに組み入れられました。これからは、本FDWGを加えた「3本のFD」で発信していきたいと思えます。

安居